EDO-TOKYO MUSEUM 江戸東京博物館

えど友

EDO-TOMO

えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

No.62
2011
（平成 23 年）
7 － 8

江戸東京博物館友の会会報

目次

平成 23 年度　定期総会開催 ……1
新役員紹介（私のプロフィール）…… 2～3
竹内館長記念講演「江戸社会の柔軟さに学ぶ」……4
友の会セミナー「怪・一夜で消えた江戸鼠山の大寺」……5
特別観覧会「五百羅漢―増上寺秘蔵の仏画」……6
江戸博クリップ「大震災のとき」……6
見学会「広重『名所江戸百景』周辺探訪ーその 4（浅草北）」……7
会議・会合日誌 ……7
えど友サークルだより ……9
えど友プラザ［特集 東日本大震災］その時、私は ……8～9
「関東直下型地震の予行？」「用心のいい人に感心」「停電の恐怖と手動式ラジオ」「やはり何もできなかった」「声をかけ合うことの大切さ」「地震は恐ろしや恐ろしや」「江戸博にいて帰宅難民に」「内緒の外出許可と自転車」
落語で江戸散歩…㉑［たがや］……10
催事案内 / 会員優待のお知らせ / ご意見にお答え… 11～12

平成23年度　定期総会開催

会員が自ら参加し創造する事業展開へ、新役員を選出

江戸博友の会の平成 23 年度定期総会は、5 月 27 日(金)13 時 15 分から江戸博 1 階ホールにおいて開催されました。司会の柏木静さんの進行により、冒頭松原会長の東日本大震災関連の話から始まり、一同犠牲者に黙とうを捧げたのち、改めて総会の開会が宣言されました。会長のあいさつのあと、来賓を代表して江戸博小林淳一副館長からご祝辞をいただきました。次いで来賓の江戸博川田明良参事、小澤弘都市歴史研究室長、鈴木緑管理課長、江里口友子事業企画課長のご紹介のあと、議長団を選出、議長に山本隆さん（事業部会）、副議長に内田勝元さん（同），書記に原盛年さん（広報部会）、松原明子さん（総務部会）が選出され議事に入りました。

はじめに、議長より出席者 132 名、委任状提出者 737 名、合計 869 名で、規定数（3 月末の会員数 1640 名の 3 分の 1 ＝ 547 名）を満たしており、総会が成立している旨の報告がありました（最終的には総数 954 名となりました）。

上程された議案は次のとおりでした。

第 1 号議案「平成 22 年度事業報告ならびに収支決算報告について」では、各種事業に多くの会員の皆さんが参加され、いずれも好評で、10 周年記念事業も全般的に成功した旨の報告がありました。ついで会員数横ばいへの対策および繰越金についての質問があり、会長より種々検討している旨答弁があり、議案は可決されました。

第 2 号議案「平成 23 年度事業計画案ならびに事業予算案について」では、震災により繰り越した事業の実施を含めた事業計画の説明のあと、「文政町方書上翻刻での費用計上についてなぜ友の会が負担するのか」との質問があり、会長が「友の会の事業として行っている」旨の答弁をして、議案は可決されました。

第 3 号議案「役員および監事の選出について」では、再任および新任の役員 13 名、監事 2 名が満場一致で承認されました。

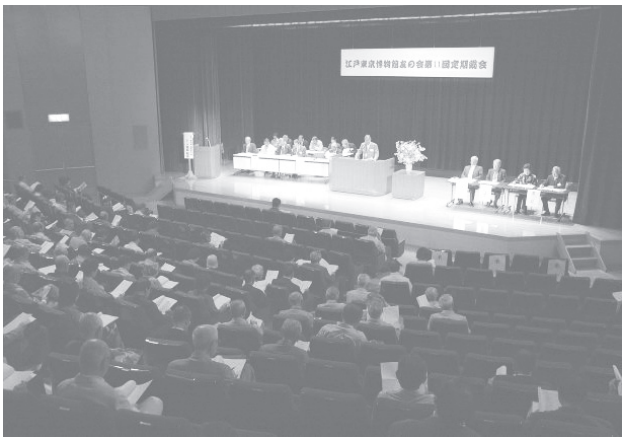
定期総会は 14 時 45 分に終了しました。

15 分間の休憩後、江戸博竹内誠館長による記念講演「江戸社会の柔軟さに学ぶ」があり、自然との共生、人との共生，モノとの共生という「江戸の心」を思い起こしましょうとのお話がありました（講演要旨は 4 ページ参照）。

その後、16 時 45 分から 7 階のレストラン「桜茶寮」で、竹内館長も出席されて会員交流会が和やかな雰囲気の中で行われました。会員の皆さんはそれぞれに有意義な 1 時間半を楽しんでいました。

また、当日「東日本大震災への義援金」を募集した結果、合計 36，812 円が寄せられました。これに友の会からの 20 万円を合わせ、日本赤十字社を通じ寄付しました。

【取材】文：広報部会・原盛年
写真：同・佐藤幸彦



新役員紹介
（私のプロフィール）

＊5月27日開催の第11回定期総会で選出された新役員15名の分担も決まりましたので、プロフィールと併せてご紹介します。よろしくご支援願います。
＊イラストは今回役員を退任された藤井文乃さんにお願いしました。

副会長　内匠屋京子（たくみやきょうこ）（総務部会長）

初入館時、淡い照明に浮かび上がる江戸・東京の町並みになぜか懐かしさと安堵感を覚え、時々特別展示にも足を運ぶようになりました。偶然に会報『えど友』を手にし、興味深い内容に感じ入り友の会に入会しました。また見学会では皆さんの歴史への造詣の深さ、健脚さに驚嘆しました。その江戸博友の会で微力ながらお手伝いさせていただけるようになって感謝しております。今後ともよろしくお願いいたします。

会　長　松原　良（まつばら　まこと）（事業部会員 広報部会員）

友の会の設立準備中のビラを手にしたのが、平成13年の「大江戸落語展」。発足とともに入会。当時はここまで深入りするとは思ってもいませんでした。今では、純パの会（純粋にパ・リーグを愛する会、パ・ファンの全国組織）の事務局長も辞め、落語を聴きに行く回数もめっきり減りました。川柳や雑俳の会には今も行っていますが、友の会の仕事？に追われる日々です。あと2年、楽しみながら頑張ろうと思っています。ご支援、ご協力をお願いいたします。

事務局長　末永俊幸（すえながとしゆき）（事業部会員 総務部会員）

まだまだ69歳、人生これからという心意気。人生の楽しみをみつけ、好きなことをやっています。ミッション（使命感や目標）を持てば、パッション（情熱）がわく。パッションがわけばアクション（行動）が生まれる。それを成し遂げようとする過程が生きがい。「みんな違って、みんないい」と自分にできることをやらせていただく毎日。広島県出身ですが、江戸大好き人間。江戸在勤歴40年。千葉市在住35年。

副会長　下永博道（しもながひろみち）（事業部会長）

友の会へは平成14年、現役を引退後「博物館を知ると人生を二倍楽しめる」という言葉に出合いすぐに入会、その後は事業部会でまた展示ガイド、ふれあいなどで館とのお付き合いをさせていただいております。会員のご協力で昨年は10周年を無事迎えることができました。世間的にも認知され、これからはさらなる躍進が求められることになります。幸い健康面では心配ありません、今までの実績を大切に、かつ会員の求めに応じた活動を心掛けます。

会　計　西村英夫（にしむらひでお）（事業部会員）

友の会では事業部会に所属して古文書講座の受付やたまにセミナーを担当したり、にわか勉強をして見学会での案内役を務めています。おかげで少しは江戸時代について知識や興味をもてました。またサークルに入れてもらい楽しく過ごさせていただいていますので、その恩返しに皆さんにお役にたてればと思っています。友の会の会員になって良かったという人が増えるように微力ながら努力いたしますのでよろしくご協力をお願いします。趣味はゴルフです、健康？でゴルフができることの幸せをかみしめています。

副会長　福島信一（ふくしましんいち）（広報部会長）

もう1期、部会長をやる他に、副会長という大任を背負わされ戸惑っております。振り返ってみますと、ボランティアなのに、かくも多くの日数を友の会や会員のために割き、行動している人たちが大勢いる、ということに驚きました。そんな縁の下のことを会員の皆さんにもっと知ってもらいたいし、また、できれば参加してもらいたい、と思ったものです。微力ながら、これからの2年をそれに向け尽力していきたいと思います。

会　計　中村貞子（なかむらていこ）（広報部会員）

新大橋に引っ越して14年目。国技館には欠かさず出かけていましたが江戸博はめったに行くことはありませんでした。会社勤めをやめてから家の近辺を歩きまわったり、『鬼平犯科帳』を読破しているうち（吉右衛門がごひいき）、ここ深川の地にも興味がわいて、それがこうじてこんなに近くにいるのに江戸博を利用しない手はないと、えど友に入会。そのうち古文書講座にはまり、一昨年12月からは広報部会の活動をお手伝いしています。

小林弘明（こばやしひろあき）（事業部会員）

「江戸御府内八十八ヵ所をめぐる会」に参加してから、その縁で「藩史研究会」「江戸東京を巡る会」「神田川を歩き楽しむ会」「江戸名所図会輪読会」と世界が広がり、主宰の方には多々ご迷惑をおかけしていますが、同好の士と過ごすひとときは最高です（想像を絶する博学の士女が多数いらっしゃいます）。能力、時間等の不足で実現は難しいのですが、サークルの立ち上げを夢想しています。皆さんもぜひサークルに参加してください。

寺田萬企代（てらだまきよ）（総務部会員）

江戸博友の会に入会して４年余りになります。総務部会に所属させていただき、慣れない私に皆さまが親切に声をかけてくださり、発送業務のお手伝いをしながら、部会の方々と都内巡りをしたり、時には他の土地までご案内いただき、新たな発見を体験いたしました。何か私なりにお返しをしたいと思い、微力ながら頑張りたいと思っております。今後もよろしくお願い申し上げます。

小西幸男（こにしゆきお）（事業部会員）

「人間は年を重ねるだけでは老いない。好奇心というか物事に対する興味や情熱を失った時に老いる」。これはサミュエル・ウルマンの詩「青春」の趣旨ですが、友の会の各種行事に参加されるシニアの方々の歴史に対する関心の高さには敬服しています。まだシャバからの足抜きができず、二足の草鞋（わらじ）をはくことになりますが、皆さんのお役に立てるよう精一杯の努力をしたいと思います。

新倉隆一（にいくらりゅういち）（総務部会員・プロジェクトメンバー）

現役を退任して江戸博友の会に再就職（？）したのは平成20年４月でした。総務部会に属し『えど友』等の発送業務に従事しています。かねて少しずつ学んでいたこともあり「文政町方書上翻刻プロジェクト」に参加させていただき、古文書の世界にはまり込んでいます。その他「見学会」の旗持ち案内役の一員として江戸切絵図の世界に浸る喜びを感じています。現役時代とはまったく異なる環境の中で楽しんでいます。

深尾恵美子（ふかおえみこ）（広報部会員）

こんにちは。ＴＶドラマ「ＪＩＮ～仁～」に完全にはまっています。今と昔が錯綜（さくそう）し、節電が叫ばれる今こそ、お国をあげて「大江戸暮らし戦略」を推進する世の中にならないかと寝ぼけています。ところで広報部会はお江戸の人口推移のように、女性比率が増加中。江戸に興味のある女性の方、女性が好きな男性の方、広報部会に入りませんか？

監事　早川良躬（はやかわよしみ）

再度監事に選ばれ光栄です。10周年記念事業の立案、挙行、効果をつぶさに実見し、「これほど充実した内容を自主運営できる会員団体は稀（まれ）」という竹内館長のお言葉どおりと感じました。江戸博友の会はまた、“生ける大江戸”であり、江戸博の相方。いきとはりに満ちた次なる10年であるよう願っています。

佐藤美代子（さとうみよこ）（広報部会員）

「江戸城」展のセミナーを受講したくて、平成18年に入会しました。入会してセミナー、見学会、観覧会、古文書講座など多彩な行事に魅せられて、せっせと参加させていただいていましたが、アルバイトが常勤でなくなったのを機に広報部会のお手伝いをさせていただいています。最近、歴史小説好きなのに江戸時代のことはあまり知らないことに気付きました。今後とも江戸探検隊の一人に加えていただければと思います。

監事　松岡勝彦（まつおかかつひこ）

前期からの継続です。先年家族でロシアのエルミタージュ美術館を訪問した際、流暢（りゅうちょう）な日本語でガイドをしてくれたマリアさんが、昨年半年間の日本文化研修で来日してきました。研修の合間の一日、江戸東京博物館を案内し、江戸東京の歴史、文化を体感してもらい、帰りにわが家に１泊し、日本の庶民生活の一端にも触れてもらいました。マリアさんとは帰国後もささやかな交流が続いています。まさに芸術文化に国境はないですね。

江戸東京博物館友の会平成 23 年度定期総会　記念講演（2011/5/27）

「江戸社会の柔軟さに学ぶ」

江戸東京博物館　　竹内　誠　館長

江戸の共生の心

江戸では自然との共生や人との共生が大切にされましたが、モノとの共生もまた大事でした。神技ともいえる手で職人が心を込めて作った工芸品など外国人が目を見張るものがありました。日本人の心性は、どんな細かいモノにも神様が宿っているので、もったいなくて捨てることなどできないという考え方ですね。焼くとか、聖なる水に流すとかして供養をするわけで、例えば針供養とか櫛（くし）供養という風習があります。モノを大切にする、モノとの共生です。こうした共生の心のほかに江戸人にはユーモアの心がありました。四角四面にお説教するわけではなく、川柳や狂歌、あるいは小説なら笑い話にして実は真を突くというのがうまいんですね。

3 月 11 日に大地震が起きました。その直後の日本人の行動を見て、あれほどの災害で略奪行為がなく皆冷静にことを受け入れている態度に感嘆の意を表する外国人の報道がなされました。避難所での少ない水や食べ物はまず弱者からと誰が言うともなく配分され、助け合い思いやる心は、本当に素晴らしいとのことでした。しかしそれは今に始まったことではなく、江戸時代から脈々と日本人の間に承（う）け継がれてきた共生の心が非常事態に発揮されたと考えられます。

3.11 について、私の身近な体験として、非常に残念というか無念な話があります。昨秋、私は「江戸の心」と題する講演を福島県飯舘村で行いました。菅野村長はじめ村民の皆さんは、工場誘致といった方策で過疎化を防ぐのではなく、農業、酪農、林業、石材業など豊かな自然の恵みをしっかりと活用することにより、日本一美しい村をめざしていました。「じっくりと」「手間暇かけて」「つつましく」（これを東北方言で「までい」というそうです）暮らそうという「までい」ライフは、自然との共生、人との共生、モノとの共生という「江戸の心」とまさに一致していました。その飯舘村が、こともあろうに原発の放射能禍により一村すべてが強制移住させられているのです。なんという不条理でしょう。

江戸の柔軟さ

このような大地震が起こった時、江戸庶民はどうしたのでしょう。安政大地震の時に描かれた「鯰（なまず）絵」には要石を背中に背負った鯰が長い髭（ひげ）で大金持ちの首を絞めて「皆が困っているのだから救済金を出しなさい」と言っている図があります。地震は怖いけれど金持ちのお金が震災で困っているところへ流れて平等になる、つまり世馴らしで、そう変化させることを世直しといいます。本当は大変なことなのにユーモアに表現しているのです。復興の力を持つことでピンチをチャンスに変える。例えば江戸の復旧工事に携わる人たちの賃金は上がり 3 年はゆうに暮せたそうで、頭を切り替えチャンスにした柔軟さがあったようです。

その他にも打ちこわしなど法律違反の件でも「喧嘩（けんか）両成敗」の名目でその日のうちに釈放された例もあります（天明の打ちこわしなど）。喧嘩にすり替えて無罪にしてしまう。民衆には法外の解決方法があったのです。事を荒立てないでうまく収めるのも知恵でしょうか。

武士と町人

百万都市と言われた江戸に住む武士と町人は士農工商の身分制度のもとで約半数ずつを占めて暮らしていました。

さぞかし町人は住みにくかったろうと思われますが、生意気な侍なんかには立ち向かっていく正義感あふれる江戸っ子気質が育まれ、私たちが思うより平等に暮らしていたのです。例えば紀州藩・江戸勤番武士・酒井伴四郎の江戸日記によると「混んでいる料理屋にいくとしばらく待たされ」とあり、庶民と同じ扱いだったようです。

また、侍の中には自宅の敷地に借家を設け町人を住まわせていて、武士と町人が混住しているという柔軟性を持っていました。

侍の中にも庶民を助ける人がけっこういまして、芝居でも活躍している遠山金四郎も天保の改革で庶民の楽しみであった寄席が全廃されるところを「寄席撤廃反対論」を唱え助けたのです。このように役人も民衆もお互い落としどころをわきまえて平和な世界を構築していったのです。物事は柔軟に考えながら共生していくことがあって欲しいなと思うわけです。

最後に、東京都教育委員会では都立高校生向け教科書『江戸から東京へ』を市販（640 円）していることをお知らせします。これには江戸博から史料の提供や館長監修など深く関わっております。ぜひこれを読んで真に日本を紹介できる国際人になっていただきたいと思います。

【記録】文：広報部会・松田悠美子
写真：同・佐藤幸彦

第105回 江戸東京博物館友の会セミナー（2011／5／20）

「怪・一夜で消えた江戸鼠山の大寺（感応寺）」

講師　伊藤榮洪さん（豊島区図書館専門研究員）

大江戸の尻尾のあたりに大寺

現在の豊島区に天保(1830～1843年)時代、二つの怪事件がありました。その一つが鼠山感応寺事件です。今池袋は有名な場所ですが、その頃は江戸市内に入るかどうかという場末で、池袋の女を嫁にもらうとあるいは下女に雇うと、その家にたたりがある、「男より女にたたる池袋」といわれました。そこからもっと離れた所が目白で、4丁目あたりが『風土記稿』にある「鼠山」、川柳では「大江戸の尻尾のあたり鼠山」といわれ、三角の地形でした。鼠山の地名は不寝番の「不寝見」からきたそうです。

磐城平藩安藤対馬守の下屋敷が今の雑司ヶ谷霊園にありましたが、上地となり御薬園になってこの地に移されたあと、また上地となり、ここに天保4(1833)年12月幕府の許可が下りて寺が建つことになりました。池上本門寺からの願い出という形をとり、日蓮宗の名刹・谷中感応寺を目白の地に復活させるものでした。「尻尾のあたり」に大寺が建つので「大きな寺を引いてきた鼠山」と江戸中が驚き、建立の寄付も進み、雑木林が切り開かれました。

天保6(1835)年8月から工事が始まりました。地形を整え置き土をして4尺（1.21m）ほどの棒で突き固める「千本突き」を、町の人々ではなく日蓮宗徒や、おそろいの着物・手拭いの御女中（本丸、一橋家、前田家など）がヨイトマケならぬ南無妙法蓮華経を唱えながらやるので、ときには数千の見物人も集まってきました。高田馬場あたりにかけての鷹狩りの場所が大変なにぎわいの地になり、「掛け茶屋2、3家」「野店」が並び、「梨、柿、濁り酒、芋、煮付け」などが売られ、「品々ことに高値」でも飛ぶように売れたそうです。

天保7(1836)年12月感応寺の本堂が完成すると、本門寺から寄進するかたちで入仏するご本尊の日蓮上人像が、時の将軍十一代家斉そっくりだというのでまた大評判を呼び、その行列を見る群衆がおしかける騒ぎは「雑司が谷感応寺かわら版」にもなって売られました。女性もお参りできるとあって、大奥からも駕籠が出、参詣人、見物人は引きも切らず、にわか商売や「上がり屋敷」が急増して、新しい繁華街が「大江戸の尻尾のあたり」に生まれると信じられました。修行僧にイケメンをそろえたとか、代参の御女中の長持ちから「生き人形」が出てきたため城を出る長持ちの目方を測るようになったとかの話があるそうです。

お美代もろとも法華三昧

寄付への幕府の格段の後援、敷地の提供、莫大な建設費用、名刹の寺号許可、何もかも破格の配慮がなされたのは、時の将軍十一代家斉の側室「お美代の方」の実父が祈祷僧日啓だったことによるものです。類まれな美貌、武家の出でないが故の気配りの良さで、お美代が家斉の寵愛を一身に集めるようになると日啓の野望も膨らんでいきます。城内は増上寺の浄土宗「お念仏」派と、日蓮宗の「お題目」派に分かれていましたが、家斉も「お美代もろとも法華三昧」となっていきました。日啓は家斉の子の眼疾加持祈祷や、急死した十代家治の霊障を解くための木像を造らせ、その社殿を中山法華経寺に建てさせたり、城内火難除けの秋葉社法要の登城権利獲得など、迷信や家斉周辺もうまく利用して地歩を固めていき、それらが3万坪（991.7a）近い新感応寺の建立につながっていきます。

家斉は十二代将軍職を45歳の次男家慶に譲りましたが、大御所として実権を握り続けました。「西の丸ではこのようにおおせです」「では、そうせい」と答える家慶は「そうせい将軍」と呼ばれたそうです。顔が異常に大きいなどの理由で家斉に嫌われましたが、彼は父に反抗して「お題目」ではなく「お念仏」を唱えて、対立はいよいよ深まりました。天保の三佞人（水野忠篤・林忠英・美濃部茂育）を中心とした西の丸派は十三代を家定ではなく、お美代の方の孫（前田犬千代）を据える計画を着々進めていましたが、家斉が急死します。老中水野忠邦らの本丸派がその善後策を講じている時寝返ってきた者があり、「陰謀」が暴かれて西の丸派は排除されました。これが、天保の改革の第一歩となりました。

感応寺始末

お美代の方は大奥から退去処分となり、実父の日啓と長兄は「破戒僧」として捕えられましたが、遠島と晒し者の処分実行前に突然牢死しました。天保12(1841)年10月、感応寺門前街は「二日の間に尽く取り払え」と命令され、寺には「朱印地の没収」「廃寺の通告」が下り、たちまち元の「大江戸の尻尾のあたり」に戻ってしまい、まさに「一夜で消えた」のでした。豊島区の「試掘調査」で証明されましたが、感応寺の跡地には礎石が一つ二つあった程度でお茶わんのかけら一つ残されていませんでした。徹底して破棄されたのでした。樹木は鬼子母神に、鐘楼などは池上本門寺に移し、取り壊した材木は売却して代金は本門寺に渡されました。『徳川実紀』にはこの顛末については1行も記述がなく、今はすべて何もないことになって、権力の恐ろしさをうかがい知る怪事件でもありました。

【記録】文：広報部会・内匠屋京子
写真：同・佐藤幸彦

江戸東京博物館友の会特別観覧会
(2011/5/16)

特別展「五百羅漢―増上寺秘蔵の仏画 幕末の絵師 狩野一信」

東日本大震災で開催が4月29日(金・祝)～7月3日(日)に変更になった特別展「五百羅漢」の特別観覧会が5月16日(月)14時から開催されました。

橋本由起子学芸員より大震災当日の様子も含めて、この展覧会の見どころをお聞きしました。

3月11日は特別展準備の真っただ中で、特別ケースに約300×90cmの軸装の「五百羅漢図」が次々と展示されて林立する中、成田山新勝寺不動堂に狩野一信が描いた壁画を約500×600cmの軸装にした「釈迦文殊普賢四天王十大弟子図」を午前中かかって展示し終えたばかりのところに大地震が発生しました。軸装の展示物がいっせいに揺れ、おさえてもおさえても揺れが収まらないのでとても心配したとのことです。必死に絵をおさえながら、「この絵と自分の命のどっちが大事だろう」と一瞬思ったほどだったそうです。

江戸時代中期以降、羅漢信仰が流行し各地で羅漢像が制作され、一信が育った本所にも羅漢寺が建立されていました。一信は1幅に5(対幅では4+6のもある)人ずつ100幅で500人の羅漢を描くという空前絶後の構想のもとに約10年間描き続けましたが、96幅まで描き終えた文久3(1863)年、数え年48歳で家にひきこもり、丁寧に描き続けたのが原因かうつ病(ノイローゼ)が起因する病気で亡くなりました。残りの4幅は妻の妙安、弟子の一純らが補って年内に完成させ増上寺に納められました。その後、妙安は明治11(1878)年に増上寺内に羅漢堂を勧進によって建立し、以後「五百羅漢図」は6幅ないし8幅ずつ公開されるようになりました。妙安は亡くなるまでの約20年間羅漢堂を守り続けたそうです。しかしながら、昭和20(1945)年に戦災による羅漢堂焼失で公開される場を失い、今に至っていました。

100幅の「五百羅漢図」が林立する会場に入ると、1幅1幅画面いっぱいに羅漢たちが修行したり、衆生を救済したりする様子が極彩色で細密かつ大胆に西洋技法も交えて丁寧に描かれています。圧倒されながら、画面を細かく見ると羅漢たちの手からビームや大風が発生したり、顔の中から仏の顔が出てきたり、ギョッとするような場面もありますが、次々ととてもおもしろい発見ができました。同時期に墨と金泥で描かれた「釈迦文殊普賢四天王十大弟子図」の前に20秒立ってライトアップによって変化する画面を見ながら、一信の筆技の冴えに感動しました。

さすがに100幅ということで全幅を一度に見た人は今までに10人ぐらいしかいないそうです。今回初めて寺外で一挙公開になり100幅全部を見ることができる良い機会とのこと、月曜開館で来館者が少ない中、ゆったりと観覧することができました。

【取材】文・写真：広報部会・佐藤美代子

江戸博クリップ

「大震災のとき」

副館長　小林淳一

私にとって生まれてこの方、まったく経験したことのない大きな地震が発生したのは、3月11日14時46分のことであった。東日本大震災――わが国観測史上、最大のマグニチュード9.0。波高10メートル以上の津波をもたらし、さらに原子力発電所の重大事故が重なった。死者1万5,405人、建築物の全壊・半壊は18万戸以上。いまだに行方のわからない人びとが8,000人以上もいる。

そのとき、私は江戸東京博物館の事務棟2階の会議室にいた。館運営の共同事業体である鹿島建物、アサヒビールとの協議会が終了した直後のことであった。激しい揺れのなかを事務室にたどり着く。とにかく、その揺れの時間が異常に長かったことは覚えている。職員は総立ちになり、互いの顔を見合わせ茫然(ぼうぜん)としている。とっさに、私はありったけの大声で(机の下に)「もぐれ！」と怒鳴った。

ひととおりの揺れがおさまったところで、次つぎに報告が入ってくる。5、6階の常設展示室で観覧中の約100人、また7階図書室で閲覧中の約20人のお客さまは、職員や警備員、案内員の誘導により避難階段を使って3階ひろばへ無事に避難した。5階に車椅子のお客さまが1人いたが、警備員が背負って長い階段を降りた。レストランやショップ、施設利用者を含め、15時20分ころには全員退避が完了した。

交通機関は全面ストップ。屋上に設置してある空調機が故障し、全館空調が困難となったことが判明。夕闇が迫るとともに寒さがしのびよってくる。当初、お客さまには館内の1階ホワイエで待機していただいたが、帰宅困難者となることを想定。独立した空調システムをもつ1・2階のレストランで過ごしてもらうべく決定した。

なかには外国人の親子連れもいたが、こちらは展示ガイドボランティアのみなさんがずっと付き添い、テレビから流される地震・交通情報を英訳のうえリアルタイムで伝えることで、見知らぬ土地での不安を和らげてくれた。館内で一夜を明かした帰宅困難者およそ100人とともに、私たち職員一同は、頻繁に続く余震のなかで夜明けを待った。

その後、復旧工事のため、5月1日の再開までに50日間の臨時休館を要することになるのだが、この未曽有の災害は、私たちの日々の暮らしに今後どのような影響を及ぼすのだろうか。そのあり方は、いやが応でも変化せざるをえないであろう。

江戸東京博物館の存在意義もおのずと問われてくるだろうな……。まんじりともせぬあの夜、お客さまのお世話をしつつ、そのようなことに思いをめぐらせていた。

◆このコラムは江戸東京博物館の学芸員や専門研究員、事務職など館職員の方に執筆をお願いしています。

江戸東京博物館友の会　見学会（2011/5/29）

「広重『名所江戸百景』ーその4」（浅草北周辺）

未曽有の東日本大震災のためいったん中止された『名所江戸百景』(浅草北周辺）見学会が5月29日(日)に行われました。今回はあいにくの雨でしたが、それでも参加者は106人で16班に分かれて巡りました。順路は浅草文化観光センター前から、雷門、旧猿若町、山谷堀公園、吉原、鷲（おおとり）神社、橋場、花川戸です。

浅草寺と猿若町

はじめは、「浅草金龍山」図の雷門(風雷神門）です。雷門は、広重が描いた9年後の慶応元(1865)年に焼けました。現在の門は昭和35(1960)年に実業家の松下幸之助が寄進したものです。松下幸之助といえばその友人だった私の祖父は、彼の助力で東京に電気器具等の製作所を設立したこともあり感無量でした。浅草神社を参拝後、言問通りを東に進み、洋品店の角を左折すると旧猿若町です。「猿わか町よるの景」図の面影は今はありません。天保改革の最中、芝居小屋が日本橋から当地に移転させられ、江戸歌舞伎始祖の猿若勘三郎（初代中村勘三郎）の名から猿若町と命名されました。

いざ吉原へ

家康が荒川の洪水対策に築いた旧日本堤（山谷堀公園）へ向かいます。遊び帰りの客が振り返ったという「見返り柳」は、今ガソリンスタンドの脇にありますが、かつては山谷堀脇の土手の上にあり、「よし原日本堤」図にも描かれています。次は、吉原大門（おおもん）跡です。「廓中東雲」図にその夜明けの光景が描かれています。

つづいて、吉原公園を抜け、お歯黒どぶのあった付近（廓外）に出ます。「浅草田圃酉の町詣」図では、遊女屋の窓から見る廓外は田圃（たんぼ）越しに富士山も見えますが、今はビルの陰に。「酉の市」で知られる鷲神社にも参拝後、関東大震災で溺死・焼死した遊女たちを供養する吉原弁財天に寄りました。もともと湿地帯だったところに、この遊廓を造成の際、残っていた花園池や弁天池も、今は名のみ。次は、しばらく歩き旧街道の入り口の鎮守たる六地蔵のある曹洞宗東禅寺、鐘ヶ淵伝説の長昌寺を訪ね、さらに東へ進みます。

橋場から今戸、花川戸

やがて、「墨田河橋場の渡かわら竈」図が描かれた、土手に突き当たります。ここで広重は、手前の竈（かまど）からの煙が上流の風景を見下ろすがごとく立ち昇らせています。雨降る今日は、対岸にある建設中のスカイツリーが、3分の2以上雲に覆われて幻想的でした。今戸町を通る途中、招き猫などを焼く「今戸焼」の店がありますが、今はこの1軒が残るのみ。さらに下流へと進み、待乳山聖天参拝後、花川戸公園で「姥ヶ池旧跡碑」や「花川戸助六歌碑」を見ました。16時30分頃浅草松屋前で解散となりました。

【記録】文・写真：広報部会・国定美津子

会議・会合日誌

2011／4～2011／5

◆役員会

4月7日(木)11時開催。東日本大震災による江戸博休館にともなう善後策を協議した。出席者12名。

4月14日(木)14時開催。総会用資料全体の概要、22年度収支決算書および23年度事業計画（案）・予算書(案)、監査報告書の確認を行った。出席者11名。

5月12日(木)14時開催。総会返信はがきの集計状況報告、当日の分担や議事進行の確認をした。出席者11名。

◆江戸博と友の会との連絡協議会

4月26日(火)14時開催。江戸博館長と友の会会長のあいさつ、役員と次期役員候補者の紹介のあと、友の会より事業の報告、計画の説明を行い、意見交換を行った。出席者17名。

◆事業部会

4月7日(木)14時開催。東日本大震災による事業への影響の状況確認、今後の予定を確認した。事業の中止および延期の会員や関係者への案内や応対について確認をした。出席者20名。

5月5日(木・祝)14時開催。総会への準備、資料内容について確認をした。5月以降の館の状況の報告があり、5、6月の事業計画を決定した。出席者21名。

◆広報部会

4月22日(金)14時開催。『えど友』61号の最終校正内容の報告があった。『えど友』62号の担当と進行状況を確認した。総会の日程、総会で報告する来年度方針等について確認した。また、広報部会が取材する際の写真撮影の学習会を行った。出席者16名。

5月19日(木)14時開催。『えど友』62号の担当と進行状況の確認をした。総会関係の確認をした後、広報部会作業マニュアルについて議論をした。出席者13名。

◆総務部会

4月27(水)13時開催。『えど友』61号の発送業務を行った。総会の進行と担当作業、今後の活動予定と担当を確認した。出席者19名。

5月24日(火)13時開催。総会および交流会の進行と内容について細部にわたり確認を行い、準備作業を行った。出席者22名。

◆文政町方書上翻刻 プロジェクト

5月5日(木・祝)Bグループ、5月19日(木)A、Bグループが例会開催。出席者は（A）8名、(B）各10名、9名。4月は東日本大震災の影響で中止。

えど友プラザ

～友の会会員の投稿欄～

特集　東日本大震災

その時、私は…

関東直下型地震の予行？

中尾敦子

その時は、蒲田駅近くで英会話レッスンの最中でした。かつてない大きな揺れで、耐震構造とも思えない古いビルの６階が今にも倒壊するのではと大きな不安に襲われました。机にもぐり揺れがおさまるのを待って非常階段から表に出ると、隣近所の建物からも大勢の人が通りいっぱいに出ていて、不安気に話し合っていました。私はすぐそばにあった自動販売機でまずお茶を買いました。それから数時間、駅ビルの階段に座り運よく持っていたウォークマンのラジオでニュースを聞きながら過ごし、仙台沖を震源とする未曾有の大地震が起きたことなどを知りました。その後「帰宅困難者」となり、大田区指定の避難所で一晩を過ごしました。毛布とクラッカーが配布され、大学講義室の大画面からは被災地の様子も映し出され、この度の地震、津波、原発事故のものすごさを逐一知ることができました。何より正しい情報を得ることの大切さと、大都会にあっても人は共通の経験を通し見知らぬ者同士でもすぐ会話できるということを実感しました。あえて申せば、関東直下型地震の予行演習のような一晩でした。

用心のいい人に感心

大沼チエ子

私はその時、銀座の高速道路下のショッピング街の地下１階レストランにいましたが、地震には全然気付きませんでした。外へ出たらサラリーマンが大勢道路に出ていて異変を知りました。ビルで仕事をしていた人たちがみんな外に出てきたらしいのです。歩道はガラスなどが落ちてくると怖いというので一部の人たちは車道に出ていました。しばらくしたら警官が来て歩道に上がるように指示していました。群衆の中には布製の頭巾をかぶっている人がいましたが、いざというときのために持ち歩いているのでしょうか。世の中には随分用心のいい人がいるものだと感心しました。

停電の恐怖と手動式ラジオ

生方正陽

その時は家（川崎市）にいましたが、仕事明けのほろ酔い気分でおまけに風呂上りでした。とっさに妻は外に出ましたが、私は中にいたままでした。どちらが正解かはいまだに分かりません。少しおさまると妻は歩いて５～６分のところにいる孫を迎えに行きました。結局私は何もできませんでしたが、妻は生まれて３カ月の孫を連れて帰ってきました。孫の親である娘はあまりの恐さに震えていました。そうこうしているうちに停電になりました。真っ暗になり、テレビの情報も入らなくなりました。停電になるととても不安になります。懐中電灯は電池切れでどれも使い物になりませんでしたが、このとき手動式のラジオがあって情報源としてとても役立ちました。隣に一人暮らしのおばあさんがいるので心細いだろうと連れてきたところへ、別のところに住んでいる息子も心配して見にきて、一家がみんなそろいローソクの灯でさながらクリスマスの夜のようになりました。その後、停電はごく狭い範囲だけだったことが分かりましたが、闇と情報が分からないのが重なりとても不安でした。

やはり何もできなかった

天野哲夫

その瞬間、わが家でのんびりしていました。木造の２階にいましたが、揺れがひどく長いので１階へ降りました。（外へ逃げられるようにと思ったのかもしれません）。１階の方が揺れは小さく感じましたが立ったまま何もできませんでした。被害は熱帯魚の水槽から水がかなり飛び出したことです。それから恐る恐る２階へ戻ったら積み重ねてあったＣＤ、雑誌、パンフレット等が散乱していました。いざとなったらとっさには何もできないとは思っていましたが、やはり火を消す程度しかできませんでした。雑誌はなるべく早めに捨てることにしたいのですが、ＣＤは…。当分は就寝中起こったら顔に降ってこないようにしなければなりません。

声をかけ合うことの大切さ

野坂紘子

あの地震の時私は家（江戸川区）にいました。とっさに外に出て植木にしがみついていましたが、すごく怖かったです。隣に住む90歳のおじいさんが見えるところにいたので、声をかけ合いながら、励まし合いました。そのおじいさんがしっかりしていたので救われました。とにかく地鳴りがすごく、何も考えることもなく植木にしがみついていましたが、こんなとき「声をかけ合う」ことがお互いを励ますことになることを実感し、その大切さをあらためて知りました。

地震は恐ろしや恐ろしや

柴田　孝

３月11日の大地震では両国のマンションの11階のため激しい揺れに襲われ、たんすや食器棚をはじめ大きな本箱が突如倒れてきました。パソコンに向かっていたため逃げ遅れ、本箱の下敷きとなりまったく脱出できず、やっと管理人に連絡がつき助けられましたが、その間の30分位は本箱と本につぶされ死ぬ思いでした。不自然な姿勢で腰を痛めましたが幸い大きな怪我は免れ、九死に一生を得た思いです。日頃妻からも多い本の整理をするようにいわれていたのですが、本箱も壊れて廃棄したので本を入れるところがなくなったため踏ん切りがついて、惜別の思いで百冊以上の本を処分すること

ができました。幸い命拾いをしたので、3月11日以降の命は“おまけの命”と考えて、これからは大いに人生を楽しんでいこうと思っている次第です。

江戸博にいて帰宅難民に

国定美津子

地震発生時、私は江戸博館内で藩史研究会の発表の最中でした。突然ゆら～と大きな横揺れが起こり、皆、机にしがみつくような体勢で様子をうかがいましたが、その後2回も大きな揺れがありましたので、発表会は中止。部屋は地下室でしたので、1階に上がると博物館側の誘導もあり、私たちはそれぞれ自宅を目指し歩きはじめました。常磐線の不通により、私は帰宅難民となり、携帯電話はつながらぬまま親せき宅に向かい泊まることになりました。翌日、常磐線は7時頃運行開始との情報でしたが、駅は「会社」、「避難所」、「親せき」に泊まったという人々であふれ、始発は点検のため3時間以上も遅れました。私が常磐線から私鉄に乗り換えて帰宅したのは午後でした。

内緒の外出許可と自転車

匿名希望

私は都内の病院に入院していました。手術後3日目でした。あの瞬間は、点滴棒をつかみながら病室をさまよいました。その恐怖がようやく落ち着き始めた頃（3時間経過）、妻のことが心配になり、いても立ってもいられなくなりました。15時頃には見舞いのため、病院に来ることになっていたのです。18時になっても、「来ない、連絡なし」…。とっさの判断で、看護師に外出許可を申請しました。術後3日目で客観的にとても外出許可が下りる状況ではありません。どこに探しに行くかまったく雲をつかむような話でした。私は病院の近くで自転車販売店を見つけ、そこに飛び込み自転車を買いました。安価なものはすでになく、残っていたのは○万円の高級自転車2台のみでした。その1台を買ってひたすら東京駅をめざしました。時間帯から判断して東京駅周辺まできているのではとの直感です。「電車の中に閉じ込められているかな」、余り土地勘のない妻のことだから「ウロウロ」歩き回ることはないだろうとは思いつつも、内心心配でたまりません。携帯電話は相変わらず通じません。20時過ぎになり、「東京駅構内」を探し回り、30分以上経過した頃、最も目立つ待合場所「銀の鈴」の椅子に妻がぼんやりと腰掛けていました。「良かった…」あの時の感激の涙は久しぶりでした。それから、泊まるところを探しましたがどこも満室でした。22時過ぎ、病院の看護師から携帯電話が鳴り「早く病院に帰ってきなさい、正式な外出許可は出しておりませんよ」とかなり怒っている様子でした。「妻は見つかったが、泊まるところを探している」と言うと、「それなら病院に連れてきなさい。空きベッドがあります」それで一件落着。後で看護師さんは「あなたの迫力に負けて外出許可を出してしまった。担当医には内緒だから冷や汗ものだった」と笑っていました。

(注・長い原稿は編集部で一部カットしました)

えど友

サークルだより

◎活動概況

- 東日本大震災による江戸博休館もあり、各サークルとも4月の例会は中止し、5月から活動を再開した。

◆**落語と講談を楽しむ会**：5月17日(火)月番・山内啓巳さんの案内で「神奈川宿歴史の道」を散策した。落語「大山詣り」の熊さんが大暴れして坊主にされた宿はこのあたりでは、「宿屋の仇討」の始終3人連れが大騒ぎした武蔵屋さんは多分この辺では、などと想像しながら、諸外国領事館跡等の史跡などをめぐった。参加者18名。

◆**藩史研究会**：5月13日(金)前回大地震で中断した国定美津子さんによる豊後国日出藩史(前号の日田藩は誤り)の研究発表が改めて行われた。日出藩は国定さんのご先祖につながる藩で発表にも熱がこもっていた。参加者は22名。

◆**古文書で『八丈実記』を読む会**：5月12日(木)に例会を開催。参加者は8名。(27日(金)は定期総会と重なったため休会)。

◆**神田川を歩き楽しむ会**：5月22日(日)、26日(木)に第17回として、西武新宿線「新井薬師」駅から東光寺を経て北原橋へ出て落合橋まで妙正寺川沿いに歩いた。途中、目白大学（落合遺跡展示室)、中井御霊神社、願正寺、宝泉寺、功運寺（吉良上野介墓ほか)、林芙美子記念館、最勝寺、染の里「二葉苑」などに寄り参拝・見学した。参加者は各28、46名。

◆**『江戸名所図会』輪読会**：5月16日(月)下永博道さんの担当で、芝浦～月波楼を読み、活発な討論を行った。参加者は21名。

❖　❖　❖

●**各サークルとも引き続きメンバーを募集**しています。奮ってご参加ください（ただし、輪読系の2サークルについては現在満員のため欠員が出たときに先着順で参加していただくことになります)。参加ご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名をご記入の上、友の会事務局へお申込みください。また**新しいサークルの立ち上げ**希望の方は友の会事務局へお問い合わせください。

申込・問合せ先

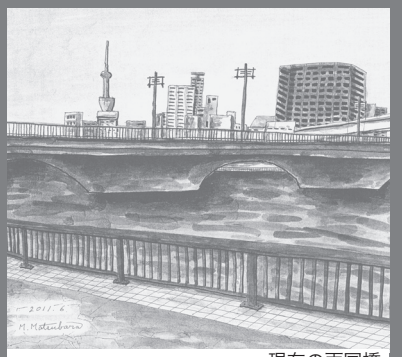
〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1

江戸東京博物館友の会事務局　Tel.03-3626-9910

落語で

江戸散歩…㉑

[たがや]



現在の両国橋

両国橋

夏の高座で演じられる定番の噺（はなし）の一つです。その舞台は両国橋。幕府は防備の面から隅田川への架橋を千住大橋以外に認めていませんでしたが、明暦の大火［明暦３(1657)年］以後、防災目的のために架橋を決めます。最初に架けられたのは万治２(1659)年もしくは寛文元(1661)年の二つの説がありますが、隅田川の２番目の橋となります。当初「大橋」と名付けられましたが、武蔵国と下総国の二つの国にまたがっていたことから俗に両国橋と呼ばれていました。元禄６(1693)年に新大橋が架けられると両国橋が正式名称となります。当初の位置は現在よりも下流でしたが、江戸の市街地が本所・深川方面に拡大され、そこへの幹線道路として大きく寄与します。また、橋の西側に設けられた広小路は、火除地としての役割も担いました。

そんな橋の上は、大勢の花火見物の人でごった返しています。そこへ本所方面から馬に乗ったお武家様一行が通りかかります。橋の上は身動きが取れない程なのですが、一行は町人達を無理やりかき分けて通ろうとします。と、反対の両国広小路の方からやって来たのが“たがや”です。道具箱と青竹の“たが”を丸めて担いでいましたが、人に押されながら橋の中央まで来たとき、それを落としてしまいます。その途端、青竹の“たが”がスルスルと伸びて馬上の殿様の陣笠を跳ね飛ばしてしまいます。町人が殿様のかぶり物を跳ね飛ばしたら、制裁を受けるのは当然です。“謝るから許してくれ”というのは町人の勝手な言い分で、武家は武家の作法で対応しなければ男が廃（すた）ります。ですから“勘弁まかりならん。屋敷へ来い”というのは当然の要求です。路上で行き違った町人を斬（き）る場合は、いくつもの決まりにのっとって斬らないといけませんでした。ですが、その屋敷内は武家の支配範囲で、そこで無礼な者を殺しても、あとで届けるだけで良いのです。ですから是が非でも屋敷に連れ帰ろうとするところに、この噺の真実さがあります。

▲“旧跡両国広小路”の碑

▲武家の行列（図１）

啖呵

“たがや”は平身低頭、謝り続けますが「勘弁まかりならん。屋敷へ来い」の一点張り。ついに切れて、裾（すそ）を尻（しり）っ端折（ばしょ）り啖呵（たんか）を切ります。

「どうしても勘弁してもらえねえんで、こんなに頼んでも……、いらねえやいっ、丸太ん棒！」

「な、なんだ、丸太ん棒とは」

「血も涙もねえ、目も鼻も口もねえ、のっぺら棒な野郎だから丸太ん棒ってんだ。この、四六の裏め！」

「わからんことを申すな。何だ四六の裏とは」

「サンピンてんだよ。たまにゃサイコロでもひっくり返してよく見やがれってんだ」

「無礼なことを申すと、手は見せんぞ」

「見せねえ手ならしまっとけ」

「大小が怖くないか」

▲たがや（図２）

「大小が怖くて暦の下を通れるかってんだ」

「二本差しておるのがわからんのか」

「わかってらい。たった二本じゃねえか。焼豆腐だって二本刺してら。気の利いたうなぎだったら四本も五本も刺してるぜ。そんなうなぎを食ったことねえだろ。おれも久しく食ってねえが。斬るのか。さあ。どこからでも斬ってくれ。さあ、首から斬るか、尻から斬るか。斬って赤くなけりゃ銭はいらねえすいか野郎ってんだ。さ、斬りやがれ」

これが江戸っ子の啖呵です。屋敷に連れて行かれれば、どうなるかわからない“たがや”の不安と強がりの気分を一気にはき出し、偉そうにしているお武家様を心地よく罵倒（ばとう）します。

まくし立てる啖呵で、たじたじとなった馬上のお殿様、「切り捨てい」と供侍に言いつけます。噺はこの後、“たがや”の首が飛ぶ演じ型もあれば、殿様の首が飛ぶ演じ型もありますが、近年は後者の型が多く演じられます。“たがやの首”が飛ぶのがもともとの型だそうで、噺の経緯から言ってもその方が妥当だと思うのですが、落語に論理の整合性などヤボなことです。……

というようなことを申し上げていたら、誌面が尽きてしまいました。今回は散歩道の紹介を割愛させていただきます。ご容赦下さい。東日本大震災の影響で開催が危ぶまれていた今年の隅田川花火大会は、８月27日(土)に行われるとのこと。今年も花火を楽しみたいと思います。

(注) 図1、2は、江戸東京博物館「大江戸八百八町」展図録の「熈代勝覧」より転載。

【取材】歩いた人(文・写真)：
広報部会・岡田守弘
イラストを描いた人：同・松原良

催事案内

古文書講座

第２期を９月から開講

古文書講座の今年度第２期は９月から下記日程で開講します。

申込の受付は７月末までです。Ａ講座かＰ講座か(午前か午後か)の希望を必ず明記してお申込みください。

◆入門編
- 講師：田中潤さん(学習院大学文学部史学科助教)
- 開催日：9/7(水)、10/5(水)、11/2(水)

◆初級編
- 講師：吉成香澄さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：9/21(水)、10/19(水)、11/16(水)

◆中級編
- 講師：長坂良宏さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：9/17(土)、10/15(土)、11/19(土)

- 時間：Ａ講座は10時30分～12時30分、Ｐ講座は14時～16時
- 申込締切：７月30日(土)必着
- 会場：各講座とも江戸博１階会議室または学習室1､2
- 定員：各講座とも80名(会員のみ)
- 参加費：各講座とも全３回1,500円(初回一括払い)

【企画担当責任者】上田太一(事業部会)

友の会特別観覧会

●都営交通100周年記念特別展
「東京の交通100年博 ～都電・バス・地下鉄の“いま・むかし”～」

◆明治44(1911)年に東京市電気局として発足した東京都交通局は今年平成23(2011)年、路面電車と電気供給事業を開始してから100年という節目の年を迎えます。明治から平成に至る東京の交通機関発展の歴史を、都営交通の歩みを中心に振り返る特別展です。普段は公開していない、交通局所蔵の模型や鉄道考古品などを核としたさまざまな資料を通して、東京都民の足として果たしてきた役割が検証されています。担当の我妻直美学芸員による「見どころ解説」をお願いしていますので、ご期待ください。なお、今回は節電(空調、照明等)のためこれまでと異なり、通常開館時間内に一般入場者と一緒に観覧することとしました。

- 開催日：７月15日(金)14時～17時
- 申込締切：７月７日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階映像ホール／企画展示室
- 定員：130名　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：映像ホールでの「見どころ解説」は無料ですが、展覧会観覧にはチケットが必要です。受付前に各自チケットをお求めください(12ページ「会員優待」参照)。

【企画担当責任者】松原良(事業部会)

友の会セミナー

第107回「江戸は一日にしてならず」

講師　谷口　榮さん(葛飾区郷土と天文の博物館・学芸員)

※３月に開催を中止したセミナーの再募集です。

◆東京下町は、江戸時代以前の歴史に馴染みの薄い地域のようです。識者も含め多くの人が､東京下町に広がる低地部は人の住みにくいというイメージが強く、この地域が発展したのは徳川家康の江戸入府によってなされたと理解しているからです。それ以前の江戸城周辺は、アシ原、沼、入江が多く、寒村だったと史書が記していますが、江戸は決して未開発の土地ではありません。東京下町に所在する遺跡や史料の吟味をもとに、「川」をキーワードに近世都市江戸成立以前の歴史像を披瀝していただきます。

○講師略歴：たにぐち・さかえ
昭和36(1961)年、東京葛飾区生まれ、葛飾育ち。国士舘大学文学部卒業。昭和63(1988)年、葛飾区教育委員会勤務。日本考古学協会会員(理事)、日本歴史学協会会員、地方史研究協議会常任委員。明治大学非常勤講師(平成15年～19年)として歴史時代の考古学、ＮＨＫ教育テレビ高校日本史講座を担当。著書は『シリーズ遺跡を学ぶ57　東京下町に眠る戦国の城　葛西城』(新泉社　平成21年)など多数。

- 開催日時：７月23日(土)14時～15時30分
- 申込締切：７月14日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200名　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】西村英夫(事業部会)

第108回「お江・秀忠と子どもたち」

講師　小和田哲男さん(静岡大学名誉教授・文学博士)

◆お江は、秀忠に嫁いだあと、５人の女の子、２人の男の子を生んだとされていますが､最近､この点についての異説も出されているので、異説を紹介しながら先生の考えをお話しいただきます。お江が取りあげられる時､よく引きあいにされるのが､お江とお福(春日局)との確執です。竹千代(家光)･国松(忠長)兄弟の確執もあわせ、この問題を検討していただきます。のち、駿河大納言忠長として駿府城主となった忠長が失脚したのはどうしてなのでしょうか。幼少時の竹千代・国松にお江がどう接していたかにさかのぼってこのことを考え、お話していただきます。

○講師略歴：おわだ・てつお
昭和19(1944)年、静岡市生まれ。早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了。文学博士(早稲田大学)。専門は日本中世史。昭和62(1987)年、静岡大学教授。現在、静岡大学名誉教授。『お江と戦国武将の妻たち』など著書多数。特に戦国時代史研究の第一人者であり今年のＮＨＫ大河ドラマをはじめ多数の大河ドラマの時代考証を担当。

- 開催日時：８月27日(土)14時～15時30分
- 申込締切：８月18日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200名　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】清水昌紘(事業部会)

えど友研究発表会

第３回「えど友研究発表会」

◆今年も、会員の皆さんによる研究発表会を開催します。発表者と演題は次のとおりです。

- 落合大海さん「車石について〜江戸時代交通史の一考察」
- 山崎進さん「浅草寺と岩井堂観音(飯能)」
- 松本慶三さん「江戸東京の菓子を見る」

以上３人の会員が研究の成果を発表されますので、多くの皆さんのご参加・聴講を期待します。

- 開催日：８月２日(火)13：00 〜 16：00
  ＊開始時刻が前号予告より 30 分繰り上がっています。
- 申込締切：７月 21 日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階会議室
- 定員：130 名　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員・同伴者とも無料

【企画担当責任者】西村英夫(事業部会)

お申込方法

＊**「えどはくカルチャー」など江戸博への申込と違い、普通はがきで宛先も「友の会事務局」と明記ください。お間違いなく!**

◆**普通はがき**に、①催事名（略名可）・開催日、②会員番号、③氏名（同伴者連記）を明記して下記の「友の会事務局」へ。
「往復はがき」の必要はありません。なお、見学会に限り傷害保険の関係で同伴者の氏名、郵便番号、住所、電話番号も書いてください。
◆締切：各催事の案内をご覧ください。
◆申込は、各催事ごとに会員１人１通。
◆友の会へのご意見・ご要望があればご記入ください。
◆申込先：〒 130-0015　東京都墨田区横網 1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日持参のうえ、受付でご登録ください。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります**。

＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などは事務局員出勤の**火曜日もしくは金曜日(10 時〜12 時、13 時〜17 時)**にお願いいたします。

＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会員優待のお知らせ

会期残りわずか、お見逃しなく！

●**特別展**

「五百羅漢―増上寺秘蔵の仏画　幕末の絵師　狩野一信」

会　期　2011年4月29日(金･祝)〜7月3日(日)
休館日：毎週月曜日
会　員：一般 650円、65歳以上320 円、大･専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大･専門生830円
＊小学生、中学生、高校生は65歳以上と同じ。
※東日本大震災の影響で開催が遅れました。

次回予告

●**特別展**

都営交通100周年記念特別展「東京の交通100年博〜都電･バス･地下鉄の“いま･むかし”〜」

会　期　2011年7月14日(木)〜9月10日(土)
休館日：8月1日(月)、8日(月)、22日(月)
会　員：一般 650円、65歳以上320 円、大･専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大･専門生830円
＊小学生、中学生、高校生は65歳以上と同じ。

企画展のご案内　好評開催中！

●「発掘された日本列島2011」

会　期　2011年6月11日(土)〜7月31日(日)
会　場　常設展示室5階　第2企画展示室

◆◇ ご意見・ご要望にお答えします ◇◆

問 地震の影響で江戸博が２カ月近く休館していて利用できなかったので、友の会会費の納付期限を２カ月間延長してもらえないでしょうか。

答 確かに会員の特典の中に江戸博の利用がありますが、それがすべてではありませんし、会費は年会費であり月割りではありません。江戸博休館中も友の会としての活動（例えば催事の企画検討・交渉や会報の編集など）は年間予算を念頭に行われており、表面に出るものだけで月割りにはできないからです。どうかご理解ください。

会報＜えど友＞第 62 号
平成 23 年７月１日発行（奇数月１日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

編集長兼発行人：松原良(会長)　副編集長：菅沼和男
編集人：佐藤幸彦、岡田守弘、深尾恵美子、福島信一、松田悠美子、中里弘子、内匠屋京子、中村貞子、原盛年、藤原理子、佐藤美代子、秋広澄江、国定美津子、天野哲夫、笹田晶子、吉森貴子、宮川勉、平林美幸
発行：江戸東京博物館友の会
〒 130-0015　東京都墨田区横網 1-4-1　電話 03-3626-9910